

*出生の地

荒木英一はいまから約五十年前、嘉永四年（一八五二）長州萩の商人副重武兵衛の長男として生まれた。副重家の先祖は、子孫の言い伝えでは、もと京都の商人であったが、勤王攘夷派と佐幕派の抗争が激しくなり、京を追われた公家衆が長州藩をたよって落ち延びてきた頃、副重家も長州に転じて藩の御用刀剣商を営んでいたと伝えられる。（但し、これは有名な七卿の長州落ちの文久三年（一八六三）以前のことである）。

英一は八歳にして父母に死別し、祖母に育てられた。兄弟がいたらしいが詳しいことは分からない。祖母は非常に熱心な本願寺門徒であって、しばしば幼い英一の手を引いてお寺参りをして回ったという。英一自身も、お寺で説教を聞くのが好きで、いつしか次第に仏法に強い関心を寄せるようになっていた。

また副重家は刀剣商という町人の身分であるが、当時の萩の城下は尊皇攘夷の熱気でおわれており、多感な英一少年も長州藩士分を取得するため、足軽身分の荒木家の養子に入り、荒木姓を称したという。時は、世情騒然として風雲急を告げる幕末、しかも討幕派の急先鋒、長州藩のただ中で英一は育ったのであった。

ことに吉田松陰が安政二年（一八五五）に出獄し、同四年から同五年暮れ再投獄される

まで叔父に替わって主宰した松下村塾こそ維新回天の原動力となった人材の宝庫である。

この物置を改造したといわれる八畳一間の私塾から、高杉晋作・伊藤利助（博文）・桂小五郎（木戸考允）・久坂玄瑞・山県有朋・品川弥二郎等々の若者達を輩出して、後には近代日本の夜明けをもたらす人々となったことは広く知られている。

ところで、この英一少年も松下村塾を遊び場にしていたと家人は伝えている。それは十歳年上の伊藤利助（博文）を慕い、使い走りの小僧のような扱いで、村塾に出入りしていたのだという。いまはそれを証すべきものとして無いけれども、たしかに松下村塾は安政六年以降、すなわち吉田松陰の再投獄・処刑以後も、引き続き小田村伊之助が主宰して数年間続けられている。また、門下生の入塾年齢も十一、二歳のものが多く見られる。松陰の叔父玉木文之進の塾も続いており、二歳年長の乃木希典が入塾している。前述の荒木家養子縁組（士分取得）の件と併せて考えてみれば、初めは、英一少年が七、八歳の頃、伊藤博文が十七歳で入塾したので、その周囲に英一少年もいたのであろう。さらにその後、十一歳前後の文久年間、すなわち村塾の最末期に英一も入塾した可能性は考えられる。

ともあれ英一が、松下村塾の庭の周辺で多感な幼少年時代を過ごし、勤王の志士として天下国家を論じ行動を起こしていった先輩達の姿を垣間見て育ったことだけは確かなことである。

*青雲の志

幕府が慶応三年（一八六七）第二次長州征伐に失敗したことは、近代への転換点となり、時勢は急速に倒幕に傾いていった。この戦いは長州にとっては乾坤一擲の大勝負であり、総力戦であった。英一はこの時十六歳で、長州軍の一兵卒として従軍したものと思われる。

続いて翌慶応四年（一八六八）正月、鳥羽伏見の戦いに参戦、伊藤博文の従者として奮闘した荒木英一はその軍功によって、藩主毛利敬親公（後に侯爵）から毛利家々紋入り朱塗りの三重盃を下賜された。これは、子孫が家宝として分け合い、いままに大事に保存している。十七歳の一下級武士が藩主から褒賞を頂戴したのであるから、それなりの戦功があったと想像される。しかし、英一自身は当時の事について子孫に話すことはなかったようである。立派な朱盃だけがその事実を伝えているに過ぎない。

ただ、英一は同郷人のよしみとともに、この戦いを通じて、薩長藩閥で占められた新政府頭官に多くの知遇を得ることになり、その人脈が後々宗門外護にどれほど役だったかはいうまでもない。この点も追々述べることにする。

さて、鳥羽伏見の戦い後、英一は東征軍には参加せず、そのまま郷里にかえったようである。その三年後、明治四年（一八七一）再び単身で京阪地方に來たり、堂島米市場の仲

買人の雇い人になる。これについて本人は、後にこう述懐している。

「・私は二十一歳に大阪へ来ました。その時は今とちがうて、丁稚奉公するにも確かな保証人がなくては置いてくれるウチはありません。もとより知る人は一人もない。加えるに旅費はわずかよりなし。そうこうするうち、一日金二朱則ちいまの十二錢五厘のはたご代に困るようになりまして、やむを得ず、下関より昔の早船に同船した人をたよりに、堂島の米相場屋の店に奉公しました。」(『大日蓮』大正十一年八月「懺悔」)

あてもないままに、萩から青雲の志を抱いて京阪地方に出てきた英一は、とりあえず一時の腰かけのつもりで堂島米市場の仲買人の店に奉公した。ちょうど世情も安定しはじめた頃で、天下の台所を預かる堂島の米市場は鴻池・三井・磯野等の発起による「堂島米商会所」としてこの年の四月に認可され、新体制で取引が再スタートしたばかりであった。いつの間にか英一は、資本主義の揺籃期に、そのまっただ中で米仲買人(相場師)としての道を歩み始める事になっていた。

またこの年、自ら仏教を研究した結果、浄土真宗から日蓮宗に改宗し、さらに同年十二月には蓮華寺講頭の森村平治の教化により、富士大石寺流に帰依した。

なお、英一が自ら仏教研究して改宗したという背景には、吉田松陰の思想に感化を受けたことが遠因になっていると思われる。即ち松陰は日頃から日蓮聖人に深く傾倒しており、

門弟にも次のように語っている。

「・・・彼らの奉ずる仏法を必ずしも善とするのではない。ただその信ずる法を広めんがために、いかなる艱難をもいとわず、生死をかえりみなかった。その勇胆剛毅は尋常の人の及ぶところではない。これをもってよく一宗をひらき、永く後人の尊崇するところとなった。すべて一業を成さんと欲する者は、この勇猛果敢がなくてはならぬ。」（古川

薫著『松下村塾』）

もともと長州は安芸とならんで一向宗門徒の勢力の強いところで、江戸後期まではほとんど日蓮門下の教線が及ばない念仏信仰の盛んな土地柄であった。そのような風土で浄土真宗の家に生まれた荒木英一を、のちに日蓮信仰に導くきっかけになった伏線が、この吉田松陰の思想的影響で

少年期の荒木英一



はなかつたかとも思われる。

英一が改宗にいたった経緯は本人が自ら語っている。

「・・その祖母がいわゆる堅門徒で、あちらこちらの寺参りに私を連れて歩かれましたか、私も子供の時から仏法が大好きで、真宗の法義はもとより各宗の法義をも聴きもし、取り調べもしましたが、法華経の法門はいわゆる聴かず嫌いでありました。・・」

「・・しかるに機縁の熟するのは不思議なもので、私の二十一歳すなわち明治四年に大阪に生まれて、ふと法華経の法義を聴聞して大いに感ずるところがあり、いまの単称日蓮宗に帰入し、明治四年十二月に、博学多識にしてしかも信行力強い某先生の教化に依りいまの日蓮正宗に転宗いたしました。」(『純正日蓮主義』)

かくして、幼い頃から信仰心のあつた荒木英一は、青年期には仏教各宗の教義を学び、合理的な精神と内発的な求道心をもって比較考察するうちに、ようやく日蓮正宗にたどり着いた。しかも正宗に帰依するや、上地令や大教院設置等、新政府による朝令暮改の政策の下に混乱する宗門護持のため、献身的な奉公に努めることとなった。

*伏見の寺田屋

幕末動乱の頃、大阪から淀川を三十石船で遡って京に上る、その玄関口ともいべき伏

見の船宿・寺田屋は薩摩藩の定宿でもあり、多くの旅人で連日賑わっていた。そうしたある日、倒幕派と公武合体派の薩摩藩士が衝突し、同志討ちしたのが寺田屋騒動である。

この事件は、文久二年（一八六二）四月、九条閔白や京都所司代らの暗殺をもくろむ誠忠組、有馬新七ら過激派浪士を、親友の鈴木勇右衛門・奈良原喜八郎ら九名が君命をおびて尋ねてきたことに始まる。それは将に倒幕に決起しようとする有馬ら一党を、「説得か、しからざれば上意討ちにせよ」という公武合体派の藩主の厳命によるものだった。

二十三日夜、大義に殉ぜんと血気にはやる有馬ら約五十名の浪士らは既に薩摩藩の定宿だった寺田屋の二階に集結していた。一階に下りて応対した有馬らが使者の説得に応ずるはずもない。激論のさなか、使者の一人道島五郎兵衛が激昂していきなり「上意」と叫んで田中顛助を斬りつけ、そのまま乱闘となった。

有馬は道島と渡り合って刀が折れたため、体当たりして身体ごと壁に押さえつけた。同志の橋口莊助に、

「おいごと刺せ！背中から刺せ！」

と叫んだ。橋口は、

「有馬あ許せ！」

と悲鳴ともつかぬ声もろとも二人を串刺しにした。たちまち其処此処で斬り合いが始まり、



寺田登勢

血しぶきと怒声の修羅場となった。騒動に気づいた二階の浪士も抜刀して階段を下りかかった一瞬、奈良原が立ちふさがって刀を前に捨て、同志討ちの非を必死に訴えたため、ようやく沈静化した。わずかな時間の乱闘だったが、あとには凄惨な血の海が残され、八名が殉死する壮絶なものだった……。

後に「寺田屋事件」と称されるこの惨劇を目の当たりにしたことが、寺田屋の女将・登勢の生き方を変えてしまったらしい。この若者達の必死の叫びが登勢の心に共鳴し、国事に奔走する志士達の世話をすることが生き甲斐になったという。食事や洗濯・繕い物、手当・看病など、それは親身になって面倒をみたという。そのため寺田屋は薩摩・長州・土佐出身の浪士のたまり場のようになっていた。そのうち登勢より五歳下の坂本龍馬も出入りするようになり、すぐ家族同然のつきあいになっていく。今に残る龍馬から登勢への手紙を見ても、ずいぶん内緒の事などあけすけに記されていて、その親密さをものごとくしている。

この騒動の五年後、ようやく薩長連合の盟約が成り、坂本龍馬が寺田屋に帰って三吉慎蔵と祝杯をあげていると、いつの間にか凡そ百二十人ほどの捕り手に嚴重に包圍されてしまふ。龍馬の気付かぬうちに町方に踏み込まれたが、お竜の機転もあり、すんでのところて虎口を逃れた事があつた。

ドラマでは、登勢が戸外に呼び出されて留められている間に捕り手に踏み込まれ、入浴中だった愛人のお竜が先に気付き、濡肌に袷一つで裏階段を駆け上がり、急を知らせる名場面である。諸文献も一樣にこの経過を事実としていて異説はない。

ところが荒木家の伝承では入浴していたのは当時十二歳の娘きぬ（後に荒木英一の妻）であり、お腰ひとつで二階にかけ登って異変を知らせたのだという。きぬはこの時のことや短銃を見せてくれた時の事は覚えてはいるが、その日のお竜のことはあまり記憶にないと語っている。当事者だったきぬの証言であるから強ち否定もできない。両説とも、それぞれが体験した事件の光景ととらえるのが妥当かもしれない。

浪士の取り締まりに当たっていた伏見奉行方はこの頃は連日探索に訪れ、それまでに何度も龍馬を捕らえようとして、寺田屋を包圍することがあつた。幕吏や新撰組等が登勢と押し問答になり、それを他の子供達と風呂桶に隠れてのぞいた経験談も伝えている……もつとも坂本龍馬は翌年、ようやく大政奉還（慶応三年十月十四日）が実現した翌月十五



伏見の寺田屋

日、河原町の近江屋で中岡慎太郎とともに刺客の手で斬殺されてしまったのだが・・・。

＊焼失後の寺田屋と荒木英一

荒木英一が後にこの寺田屋に出入りするようになったのは伊藤博文が連れていったらしい。その時期は定かでないが、伊藤の従者として、鳥羽伏見の戦いに参戦していた前後と思われる。その数年後に再上京してからも、しばしば寺田家を訪れていたようで、いつしか登勢に気に入られるようになっていく。登勢三十五歳の時に没した夫・伊助（元治元年七月廿三日没）との間には一男三女があり、その上孤児を五人ほど育てている。夫はどちらかといえはお人好しで鷹揚な性格だったらしい。そのため登勢は女手ひとつで、宿屋を切り盛りしながら、沢山の子供を育てていたが、慶応四年（明治元年）一月の鳥羽伏見の戦い（戊辰戦争）で町ぐるみ焼け野原となり、寺田屋も焼失してしまった。

被災後、寺田屋一家は、もとの場所に「仮屋」を建てて住んでいた。お登勢よりお竜への手紙が残されているので、読みやすく訳して引用すると次のような内容である。

「・・・まだまだたとんと申し上ぐ事も、やまやまに候へ共、此の頃は他所にかかり人になり、思うにまかせず、内も仮屋を立て居り申し候ゆへ、ほんのあらまし申し上げ候。又の便りにくわしく御咄し申し上げ候。伊助始め、りき、きぬ、とりよりよろしく申し上げ候。・・・後略・・・」

とせより。

お龍様事 おとも様江

「『坂本龍馬全集』第四版」

英一が再び上洛して訪れた時、一家は焼け跡に仮小屋を建てて窮屈な生活を余儀なくされていた。文中の「伊助（長男・七代）始め、りき、きぬ、とり」が当時の家族と推定される。好青年の荒木英一が、寺田屋と親戚同然のつきあいになるのはそう時間はかからなかった。登勢も、この見どころのある青年に亡き坂本龍馬のイメージを重ねていたのかも知れない。わが娘の婿となる事を願っていた。

ところで、坂本龍馬は『閑愁録』で、基督教の進出に対して日本は仏教を興隆して対抗すべしと提唱している。英一も前述のように仏教に強い関心を持ち、独学で学んだ結果、明治四年十二月に改宗し、大阪北野の蓮華寺に帰依している。英一は登勢にも熱心に信仰をすすめ、やがて寺田の家を本宗に導いた。

そして、初めはゆえあって四女たき（養女カ）を妻^めとって一時入籍するが、すぐに離別して、明治八年（一八七五）には相愛の三女きぬと所帯をもっている。始めたばかりの米仲買商も順調だったようで、明治九年初めには京・木屋町二条下る十二番に居宅を定めて新たな出発をしている。

同じ年十月には、北野の蓮華寺留錫中の隠尊の日露師を自宅に招き、一家の縁者や住本寺の講中などを集めての説法（宅お講）などで三日ほど滞在いただいた。これは新居の披露をかねたものだったようである。その間には、京・住本寺講頭に加藤氏とともに日露師を修学院離宮見物などにも案内しており、丁重に歓待申し上げている。

ところが明治十年九月七日、氣丈だった登勢が、長年の無理がたたったのか、わずか四十八歳で急逝してしまった。肺病だったといわれる。息子の七代目伊助はまだ十六歳、英一は二十八歳だった。

改宗したばかりだったので、葬儀は多少もめたのかもしれない。旧来の菩提寺、浄土宗松林院の過去帳には「真誉照縁禅定尼」と記載され、松林院前の寺田家墓地及び住本寺過去帳には「喜道院妙持信女」と、登勢の戒名が二種あって、改宗の事実とそれ以降の史実を知らない坂本龍馬の研究者を惑わせている。

品川の妙光寺には寺田の縁者だった西尾喜三郎家から納めた寺田伊助家の常住御本尊が

所蔵されており^(注)、伊助は京・九条にあった住本寺の本因妙講中に所属していたことが判明する。御本尊授与に厳格だった大石寺派のあり方からして、その経緯を勘案すると登勢の逝去以前に改宗していたこともほぼ確かであろう。

おりから、明治九年には京阪間にも鉄道が開通し、伏見の町の復興もまだできていないうちに三十石船の時代も終わり、船宿の再建も難しくなっていた。ましてや一人で切り盛りしていたしつかり者の女将を失っては、宿屋を廃業する他なかったのだろう。やがて伊助は母登勢の郷里だった近江の大江へ転居し、姉妹たちもそれぞれに嫁いで寺田屋を去っている。英一ときぬが、主にかわって、寺田の家の事やら妹たちのことを、何くれと心配したのである。登勢亡きあとの整理が一段落すると英一・きぬ夫妻は大阪・堂島に出てきて米仲買商として本格的な商いを始め、頭角を現すのである。また坂本龍馬・寺田屋と荒木英一には面白いエピソードがあるので、後に章を改めて述べることにする。

(注)「〇布師筆本尊 明治十四年巳十月大会之刻 宗祖大聖人第六百御遠忌千七百幅之内

現当二世授与之京都本因妙講中寺田伊助

(五十六世応師加筆) 大正九年一月元旦奉加筆

後感得主東京信徒西尾喜三郎(奉納主西尾喜多子)

○布師筆本尊 明治十六年末七月仏生日 鎮護息災延命一切無障礙之偈

授与之京都本因講中寺田伊助(奉納主西尾喜多子)

『妙光寺百年史』

*明治初期の宗勢

幕末の動乱は、人心の動揺と社会不安をもたらし、草深い山里をも平穩にはおかなかつた。ことに治安の悪化は、寺院として例外ではなく、大石寺中にも放火や泥棒・押し込み強盗が頻発し、僧風も乱れ法運は次第に衰えつつあった。

そこに幕府が倒れて「御一新」が始まると、新政府の復古主義によって神仏分離令が布告された。さらに上地令(寺社領の国有地化)や寺請制度の廃止などの政策によって、寺領と檀家制度によって守られて長年惰眠を貪っていた仏教界は、屋台骨をゆさぶられることになった。

すなわち、一方では、政府中枢に入った平田神道一派の主導により、神道による天皇神格化を精神的支柱にしようという神道国教化の国策によって仏教が切り捨てられたこと、また一方では、文明開化と富国強兵という革新的政策が、旧来の文物・制度・慣習を迷信・悪弊として改めようとするものであったから、伝統的仏教教団も過去の遺物として時代

にとり残されてしまう命運にあった。

新政府はまず祭政一致の方針を立て、神道を国教化して仏教を抑圧する政策をとった。具体的には神仏判然令に続いて、さらに同年十月には京都法華宗十六本山に布告して、三番神の祭祀を禁じ、また曼荼羅中の天照・八幡神勸請を神仏混交として書写を禁じている。現に祀ってあるものは焼却すべしという厳しい布令であったから、京都日蓮宗諸寺院においては、多くの神像が破棄されたばかりか、曼荼羅の天照・八幡二神を紙を貼って隠すような騒ぎになっていた。

新政府の仏教抑圧の姿勢に便乗した神道者によって、廃仏毀釈の運動はさらに全国に波及した。それは各藩や地方によってばらつきはあるが、明治六、七年頃までに、仏教寺院と僧侶に深刻な打撃を与えている。たとえば排仏の嵐が強かった鹿児島藩領ではこの時廃された寺院一〇六六ヶ寺、還俗僧二九六四名に及んだという。その後も、全国的に石造物などへの破壊が続いている。奈良興福寺や坂本日吉神社の排仏の徹底ぶりはつとに有名で、中国における文化大革命のように、かけがえのない多くの国宝級文化財を一挙に失うこととなった。

このような仏教排斥の嵐は本宗にも深刻な影響をもたらしていた。例えば徳島敬台寺は寺僧が寺ぐるみ売却して還俗したり、鳥取日香寺や磐城妙法寺も一時廃絶してしまった。

保田妙本寺門末でも日向一門が大打撃を受けている。維新以来、閉鎖状態にあった細草檀林も無祿無檀につき明治六年には廃校の憂き目にあっている。

また仏教寺院の退潮に追い打ちをかけたのが明治四年・同八年の上地令である。これは幕府や大名から寄進されていた寺領の田畠が、諸大名領の廃藩置県とともに、村高として上地（国有地化）とされた上、境内山林等も堂塔伽藍の周囲を除いて、すべて官有地とするものであった。これによって大石寺も御影堂や山門、黒門周辺の杉林をはじめ山林約三十七町歩のすべてが上地となって、風倒木の伐採さえままならない状態となってしまった。こうした宗勢の衰退ぶりは、大石寺の在住僧侶の人数によってみても明らかである。寺中の僧侶数を当時の書上・人別帳等によって調べてみると、次のようになる。

○寛文三年（一六六三）五三人

○安永九年（一七八〇）一五〇人

○明治五年（一八七二）三三人

大坊や塔中支坊等に在住する教師・所化小僧の総計が上記の人数であるから、江戸後期から明治初期にかけて、宗勢が如何に衰退していったかが想像できる。（ちなみに今の本山在勤僧侶数は三〇〇人程度であろうか）。さらに門末寺院数についてみても、教師は少なく貧寺は多しで、明治二年の書上では末寺四十一カ寺を載せているが、無住寺院を除けば

四十ヶ寺にみたないありさまであった。結局、この時期大石寺派は貫首以下約五十人ほどの教師と五、六千所帯の檀家で維持されていたことになる。

荒木英一が帰依した時代の宗勢は、教義信仰の面でも、人材的にも、経済的にも、まったくふるわぬ衰退期であった。それにもかかわらず、この小教団が支えられてきたのは、日興上人以来受け継がれてきた護法の精神と、日興門流の正嫡意識ではなかつたろうか。露師は、明治七年に奈良の興福寺や宇治・京都の諸大寺を遊歴し、その零落頽廢ぶりを目の当たりにして日記に次のように記している。

「・・・これを思えば御山の衰微、堂塔の破壊は勿論の事、更に歎くべきに之れ無く、ただただ大法の正信を遂げ候のみ、一大事と存じ候。いかなる小坊、たとえ俗家にありとも、大法の正信を立て徹し候こそ第一と存じ候」(『諸記録』⑫―127頁)

*御奉公のはじめ―所轄本山問題

新政府の仏教抑圧策はやがて庶民から強い反発を受けて大きな混乱を引き起こし、まもなく政策を転換している。すなわち明治五年三月になると神祇省を廃して教部省を設け、同年四月には神官・僧侶を統制するために教導職十四級を設け、三条教則(敬神愛国・天理人道・皇上奉戴)に基づいて、仏教各派に国民の教化を担わせようとした。

また同年十月にはその政策の一環として、仏教各派を天台・真言・日蓮等の各一宗一管長制として統制することを布告した。新たに大教院を設け、政府による宗教統制と、国民教化体制のための請負化を試みたのである。翌明治六年一月の大教院開院式には芝の増上寺本堂に大きな神式祭壇が設けられて、各宗管長も神式のお祓いを受け、訓令を受けることになった。日蓮宗からは越後本成寺の顯日琳が最初の管長に任じられている。

この明治五年の一宗一管長令の布告は、多くの本山末寺を各宗ごとに一本化し、有力な本山の長に宗派内の行政権を与えて、政府の宗教政策の下請け機関化しようというものであった。しかし一致派・勝劣派・富士派・不受不施派等、教義や化儀・法系の違いから数百年の間各門流に分立し対抗していた日蓮門下にとって、他派の監督下に置かれるような制度改革は到底受け入れられるものではなかった。

ところが一方ではこの新政府の流れに便乗した動きがあった。一宗一管長令の布告より以前に情報を得ていた日蓮宗有力七本山が密かに盟約し、全国の日蓮系諸寺を、この七本山で分割支配しようと工作していたのである。そのため官庁に働きかけて根回しする一方、管長職も七本山の貫首による独占という密約もできていた。

この時期の露師の書簡にも、「これでは大石寺が一本山たるを廃止され、身延の所轄になつてしまうので成りゆきを心配している。一致（身延）派の側からは早くもへ大石寺は

いずれ身延の末寺になる等と言いふらされ、僧俗ともに大いに困惑している」という文面がみられる。(『諸記録』⑧—54頁)

これを察知した要法寺日貫、日志等はその謀計を阻止すべく迅速な行動を起こし、富士五山や本能寺・本興寺等に働きかけ、連名をもって教部省にその非なることを陳情した。

大石寺側もこれに同調して、明治六年(一八七三)五月二十八日に連判・捺印の上、七本山の専横停止を申し立てた。

しかし、大石寺貫首の胤師はすでにこの年の一月に単独で一本寺独立願を教部省に提出しており、この時、勝劣派各山に協調して連判に加わり、その一方で七月二十八日にも再び大石寺一本寺独立願の請願をしている。この請願のための上京に当たって、これを支援するために荒木英一が胤師にお供したのである。

清勇(英一)はこの時のことを晩年に回想して、

「それ以来、明治六年に大教院より各宗ともに一大総本山を定めそれに所轄すべしと命令が出ました。そのさい時のご貫主五十四代日胤上人が不惜身命のご諫争を遊されました。私もその時、どこまでもお伴をする決心で、講中の主なる諸君とも永別の水盃をして上京しました」(『懺悔』大正十一年八月『大日蓮』所収、以下同じ)

と述べている。講中の代表のような形で出発したのである。いまから考えると、二十三

歳の入信間もない青年が、京阪からまず大石寺へ登り、ついで貫首に随行して政府に陳情するなど、想像できることではない。しかし荒木英一のずばぬけた行動力は、この時分から発揮されていた。おそらく長州閥の人脈をたよりに政府役人への口利きを依頼するため奔走したことであろう。

しかし、努力の甲斐なく、この独立本寺の出願は、同年九月二十四日、胤師が初代管長顕日琳（本成寺派）とともに教部省によびだされ、大石寺の独立願が政府の方針に反する筋違いの出願として、役人から厳しく説諭されたうえ却下された。その上、勝劣派としての分立を共に請願中だった勝劣派他山からは抜け駆け的行為として非難されるなど、まったく良いところなしに終わった（注）。

結局、翌明治七年に勝劣四派合同の「日蓮宗勝劣派」として認可され、ついで明治九年には興門八本山合同の「日蓮宗興門派」として分立、管長は八本山持ち回りということまで新政府に認められ、なんとか身延等の管轄下に置かれることなく一往の落着を見た。

政治権力に縁のない小教団にとって、社会の現実はまだことに厳しいものである。英一はひそかに自身の果たすべき使命を思ったに違いない。

（注）本山所轄問題については原日認著『明治維新の教傑 日貫上人』要法寺刊、富谷日震著『本宗史綱』要法寺刊が詳しい。

*戒壇御本尊の一時秘匿

ところで、英一の回想に「不惜身命」「どこまでもお伴をする決心」「講中の主なる諸君とも永別の水盃」等と、上京するについて緊迫した状況を思わせる記述がある。その背景には教部省への一本寺独立請願だけではない、何か特殊事情が存在したことが感じられる。それが同じ時期にひそかに行われた戒壇御本尊の一時遷座かと思われる。

この件は当事者間で箝口令が敷かれ、その後も極秘扱いされていたようで、今でも宗門の公式記録には載せられていない。伝聞と断片的な記録から掘り起こしてみよう。

明治元年の神仏分離令から始まった神道国教化の動きは、やがて全国的な廃仏毀釈の騒動となって各地で混乱が続いた。日蓮宗の多くは法華神道があり、ために諸本山には三十三番神初め諸神祇の称号使用禁止、および曼荼羅本尊中の天照太神・八幡大菩薩の配祀禁止が通達されている。一部には政府役人によって本尊の取調べがあり、疑わしきものは引き上げられる事もあったという。前にも述べたが京都諸本山でも曼荼羅中の天照・八幡に紙を貼ったり、三十三番神の神像を片付けるなど対応に追われた。この噂を聞いた胤師らは大いに驚き、一時的にせよ神道者流が如何なる口実を設けて取調べなどという事態が起こるやも知れず、心の安まることは無かった。明治六、七年、廃仏毀釈も下火になっていたが、

その余波と宗教行政の朝令暮改は続いていた。胤師は不測の事態に備えるために、隠尊（英師・霑師・盛師）や有力信徒に計って、戒壇御本尊をひそかに運び出して隠匿する計画を立てた。世情が平穩になるまで、戒壇御本尊を疎開するためという。

伝聞によれば秘匿に当たって先ず模写の本尊をつくって密かに御宝蔵に納め、戒壇板本尊を菰こもに包んで極秘裡に運び出し、六人警固をもって馬の背に付けて東京に向けて搬送した。途中急峻な箱根山をようやく越えて、銀座弓町にあった松島朝蔵宅で一泊、翌日人目を避けるようにして本郷の前田邸（大聖寺藩主前田利とし公が熱心な信徒であった）内の土蔵に遷座したというもの。この時お供した信徒は以下の六名である。

「松島朝蔵（覚道・四十七歳）・山田善兵衛（法山・三十六歳）・吉野万吉（二十七歳）・山野弥兵衛（四十七歳）・荒木清勇（英一・二十四歳）・富田寿永（不明）」

その後、明治十年になって大石寺の御宝蔵に還御されたといわれ、この時の功によって明治十年には松島朝蔵が賞与本尊を受けている。

この件は、松島朝蔵の親戚・松本佐蔵著『弘安二年の大曼荼羅と日興師』に記述があり、一部の人にはよく知られていたが、伝聞だけで確かなものとは言い難かった。今回、亨師の日記中に関連した記述があることを某師に教示して頂いたので、読者の参考に供する。

「堀日記中（当時常泉寺住）（明治四十四年十二月七日の日記）」

「一、山田老来ル、健抄ノ残り持参也、

明治七年中胤師ノ命ニ依リ楠二寸二分ノ戒旦御本尊と

丈幅同等ノモノヲ製シテ四十余日ニシテ成リ之ヲ納メテ

又正本尊ヲ供奉シ松島宅ニ御一泊、更ニ前田家ノ

宝蔵ニ入レ全十年御本山ニ還住等ノ苦心談ヲ聞ク」

文中の山田老とは山田善兵衛（号・法山）のこと。なお、この遷座を行った年次は諸説あるが松島家の伝聞では明治四、五年頃と推定し、これが有力視されてきた。

しかし荒木英一の本宗帰依が明治四年十二月であること。（是一） また荒木英一著『世界第一本尊論』の次の記述。（是二） そして山田老の談話。（是三） さらに蓮華寺蔵戒壇御本尊正写の胤師脇書。（是四） 以上四つの理由から明治六年が妥当と推定する。即ち英一著の同書によれば、

「予が壮年の頃（明治六年七月）大石寺五十四代日胤上人に随従して東京小梅常泉寺境内の本種院に滞在中、時の常泉寺住職泰俊坊といへる方は元富士の下條妙蓮寺の学頭なりしが或る日談話中神四郎のことに及びたりしに……（中略）……予は当時壮年の上石山に帰入早々の事故格別気にも止めず聞き流し……」（『世界第一本尊論』二三頁）

と、明確な年月を記録している。

次に、北野蓮華寺蔵御本尊に次のような脇書を持つ戒壇御本尊正写の紙幅本尊がある。

「(胤師筆) 戒壇本尊正写 明治六年五月十三日

右者明治六年七月宗門七大寺江所轄可致勅定在之、野僧難耐教部省江

直訴仕如本独立本山二且亦同省江建白為大願成就之奉書写之 五十代日胤」

この脇書によれば胤師が最も耐え難く不安だったのは、身延・池上等の七大寺の所轄となつて大石寺がその支配下に組み込まれる事であつた。そうなれば新政府権力を後ろ盾として七本山がどのような難題を持ちかけてくるかも分からず、戒壇御本尊の改めなどという不測の事態も予想される。寛政法難における要法寺本末への本尊改めなど、まだ記憶に新しい事件でもあつた。このように見たとき胤師の独立本山直訴・建白という必死の行動の真因も理解できるし、戒壇御本尊の一時秘匿もあり得べき行動といえよう。戒壇御本尊の寸法・座配・腰書等の正写という異例の書写も、それを物語っているように思われる。

また胤師は宗門の内外に気付かれず極秘裏に遷座するために、表向きの理由は独立本山の直訴の件で上京するという事にして出立したに違いない。しかも宿舎の本種院では戒壇御本尊の願主等について話題が及んでいる。この一時秘匿の隠密作戦は、関係者の心底深く刻まれていたであろう。

要するにこの件は廃仏毀釈の余波を警戒したというより、身延等の管轄支配下になることを憂慮しての予防的措置であった。なお「霑師日記」の明治七年の書状控え記録には、

「本山も何角繁用・・当境へハ一切文通もこれなきニ付・・かつまた本郷屋敷東京の様子も承らず、本郷御屋敷別条無く、寿正院様ニも御機嫌克く在しなされ候や、御序も候はば貴許方より宜敷く御機嫌御伺い給るべく候・・」(『諸記録』⑫―129頁)

とあって、本郷の前田邸を深く気にされていることを付け加えておく。

また、戒壇御本尊が御宝蔵に元の如く還御されたという明治十年は、日蓮宗興門派として一宗が認められて他門の管轄下となる心配も無くなった時機に符合する。模写の御本尊は板とも紙幅ともいうが、その御本尊は還御後に焼却されたと言われている。

なお、戒壇御本尊の前田邸遷座という歴史の一コマは、現在の宗門の信仰と教義について微妙で複雑な問題を投げかけるため、今でもタブー視されていると思われる。

＊法論の初陣「倉垣問答」

大阪の北部というよりむしろ、丹波地方に近い能勢の里は、低い里山の合間に集落が点在する農村地帯。近郷には多田源氏の発祥の地・多田荘をひかえており、鎌倉時代以来の旧家も珍しくない。この地方は、江戸初期の領主能勢氏によってことごとく日蓮宗に改宗

させられた、いわゆる一円皆法華の地としても有名である。

その一郷に倉垣村がある。万葉集にも詠われた歌垣（倉垣・鞍懸）山から南を眺めると中央には千石谷と称する水田が広がって、それをし字形に取り囲むように農家が点在、周囲の里山には手入れの行き届いた栗林が多く見られる。どこにでもある日本人の故郷のようないな美しい農村である。

歌垣山の麓に居を構える井上條之助家は、代々多田御家人の取締役という家柄で、幕末にはこの地方の郷士をまとめて、禁裏御守衛士として交替で上洛し、勤番に当たっていたことが古文書に見えている。近隣の奥感兵衛家はその本家にあたり、慶応頃には、両家ともに御所警護に勤番しており、奥家にもその鑑札が伝えられている。

その奥感兵衛が御所守衛のために京都滞在中、住本寺講頭に加藤廉三らの教化によって帰依したことが本宗信仰の始めである。それは、明治二年に、奥感兵衛が領主の能勢陣屋に三十両を貸し付け、その金利（毎年千疋）を供養する旨の証文が住本寺に残っていることでも知られる。また、霑師の書状が数通、同家に伝えられていたことから分かる。奥感兵衛・源之進父子は篤信者であるとともに、井上條之助・條橘父子と並んでこの地方きっての名望家だったようで、孫の奥基次郎は明治十二年に第一回大阪府会議員に選ばれ、同じく井上虎平は郡議会議員を勤めているほどである。

この奥・井上両家の教化により、倉垣の旧家、中西、畑、西田等々、村長や医師などをつとめる村の名士が次々と日興門流の信仰に帰依していった。

おりから明治八年頃になると、信教の自由、すなわち改宗の自由が認められた。そこで井上條橘・奥源之進らを代表として十数軒の家が、同地の日蓮宗妙法寺に対し、たびたび離檀改宗を申し入れたが、妙法寺側は言を左右にして承諾を拒んでいた。

そこで翌明治九年九月になって、京都から加藤廉三（五十一歳）と荒木英一（二十六歳）の応援を得て、一同で妙法寺を訪問、あらためて離檀を申し入れた。当然、離檀の理由として身延離山の話から本尊論や本迹問題などが申し立てられたようである。

これに驚いた妙法寺住職が、檀家が総崩れになるのを何とかくい止めようと画策して起こったのが倉垣問答である。

井上・奥兩人からも、身延門流謗法の指摘を受け、返答に窮した妙法寺日庸は、その後になって井上・奥兩人に対し十四力条からなる質問状を発している。その文末には次のように記している。

「さては、記し差し出し候事件、愚俗の為に承り置きたく、界紙あきの所へ朱書にて両先生へお書き入れ願いたく、右申し述べ度、早々、不一。」

要するに井上・奥兩人から批判された本迹一致の誤りや不読誦不造像、薄墨法衣の根拠

等を、質問事項のアトの空欄に書いて返答せよというものである。この質問状は今見ても、文意はあいまいで、誤字等も多い。「愚俗のために伺っておきたい・・・」などは一寺の住職のいう文言ではない。僧侶としても見識のない内容である。

この質問状に対し、両人は再び加藤廉三の助言を求めたらしく、その往復文書が『富士宗学要集』にも掲載されている。これによると、その翌年にかけて、加藤・荒木（当時儀兵衛と称す）連名で妙法寺側と三度にわたって文書による応答が行われている。

しかし、書面によるやりとりでは埒が明かないと見たか、妙法寺側は、結局この年の十月十八日、十九日にわたって、離壇を希望する者全員を妙法寺によびだし、講演会にかこつけて大勢の僧侶で威圧し、強引に説得してその動きを封じようとしたのであった。（ちなみに荒木英一は、この十月十二日〜十四日まで木屋町二条の自宅に露師を招き、十六日に帰山するのを見送ったばかりであった。）

この妙法寺での一件は、その知らせを受けた布師の書状（宛富士本広正・源立寺蔵）に詳しいので、ここではそれを引用することにした。

「・・・前略・・・御地の同行衆、当流へ改宗離壇いたしたき旨、たびたび菩提寺へあい頼み候ところ、昨十月十八日には能勢倉垣村妙法寺へ一致の僧・大阪中院院づめ権大講義日嚴と申すものを派出にて、近辺四、五里にふれ達し、かの妙法寺へ十四か寺の長たる

寺院集会上、当門能勢の講頭井上條橘殿はじめ二十軒あまり呼びだし、当門破折の心づもり、十八、十九日両日の説教これあるよしにつき、貴許方（とちしやく）の手配ゆえ当門にても西京加藤廉三殿並びに大阪講中荒木、牧野、田村その他五、六名にて彼の説教中に、忽然とあらわれ、まず最初に荒木清勇殿發言にて、『興門退治のおもむきを承りたし』と申し候ところ、かの日嚴一言の返答もこれなし。また押問諸難をいたされ、かつまた井上條橘殿の難問、『ここに安置する造仏は無間（地獄）なり』と申すに、さらに返答これなし。一言の返答にも及ばず、口をして鼻のごとくいよいよ閉口に候はば、『改宗勝手たるべき』むね申し入れ、かつこと約義決定にあいなり、事すみのよし。

西京加藤氏も後陣にひかえ、先陣たる荒木の新手に大敵降伏いたされ、実に先陣後陣と合隊にあらざれば、あいなり難く、異体同心ならば軍（いくさ）に負けずと仰せおかれ候。後陣も出陣にあいならず、前陣にて切り破り、当門の大勝利の段、まことに各々方の大奮発、別しては三宝御加護ひとえにありがたきことに存じ候。

かつまた、かの日嚴なるもの両日の説教を一日にてあい止め、尾を巻いて早々あい退き候。なんとも大笑至極、こことも一同あい悦びまかりあり候。なおまた加藤氏の詠まれし速吟には、

吹きおろす富士の嵐の烈しくて

能勢の木葉はちりうせにけり

と。実に面目、さすが後陣ゆえ智仁勇兼備の加藤氏と一入ひとお感じいることにござ候。・
・(以下略)

布師の流ちような筆づかいが、問答の様子をいきいきと写しとっているので、当日の様子がよく分かる。

その日、能勢一帯の主な日蓮宗寺院住職が多数集まって、大阪からは、関西宗務所の大物・浪越日厳の出張をたのみ、日興門流破折の演説にことよせて、能勢の講衆を一気に説き伏せようと試みた。もともと能勢には妙見山があり、倉垣村も身延中興の寂照日乾に由緒ある身延派の金城湯池、沽券に関わる問題でもあった。事前対策は大がかりとなり、ぬかりはなかった。ところが妙法寺の本堂に参集して待ち受け、いざ演説会を始めようとするや、思いがけず、荒木清勇のするどい舌鋒にあつて、思いもよらない展開になり、狼狽して日蓮宗僧侶側の一方的な敗北となつてしまつたという。

多少の誇張はあるのだろうが、それにしても、大勢の僧侶が集まっていたはずなのに、論争にすらならなかつた。もともと離檀妨害という材料が悪い上に、相手が悪かつた。すでに僧侶側も荒木や加藤の手強さを知っていたのかもしれない。

しかし、もともと日蓮宗僧侶の多くは檀家制度の上にあぐらをかいて、生活のために葬

祭や祈祷を専らとする者が多く、いま現在でも法義の研鑽はおろか、信心すら疑わしい住職連が多い。はたして、このてんぶら僧侶（コロモだけの僧侶）が、強い求道心と深い法門の素養をもつ加藤廉三や荒木清勇らに、法論でかなうわけがなかった。また、社会的にみても有識者層とみなされる倉垣の人々が、主体的な信仰に目覚めて、自ら正法を求めているものを、翻意させられるわけもなかった。

この日の一件は当時の新聞にも報道され、能勢地方でも評判になったようである。そのためか、これを契機に新たに入信する者も加わり、倉垣の法華講衆は大いに意気があがったものである。

かくして、確信を深めた二十数軒の法華講衆の人々は、何よりもまず、自分達の帰命依止の道場である新寺建立のために汗を流すこととなった。

ひきつづき応分の募財に尽力した結果、早くも翌年には講中の一人が用地を寄進して倉垣山裾の棚状の平坦地を切り開き、本妙庵を設け、源立寺什宝であった板本尊（日堅師筆・大塩政之丞授与）と宗祖御影様を御安置申し上げることができた。

その後、井上條橘（広頼房）が出家して御本尊のお給仕に当たるとともに、明治十四年には説教所として正式に大阪府の許可も下り、大倉山広基寺として、小さいながらも次第に莊嚴仏具も調い、日興門流の法燈を輝かすこととなった。

*源立寺移転と池田問答

ところで、先に紹介した布師書状は、源立寺の広正房（富士本智境）に宛てられたものである。倉垣問答のあったこの頃、大阪長柄・源立寺の住職に任ぜられたばかりの広正房は、池田に寺地移転のため、多忙な日々を送っていた。

池田の講中の発祥は、これより先、維新前後に田村由兵衛（量詮）が北野蓮華寺に帰依するや、明治四年には堺本伝寺の再建に尽力し、ついで明治七年に池田・本町で酒造業を営む酒屋石井たけ家の跡継ぎとなっていた実弟・石井政七を教化し、さらにその舎弟で池田本養寺の住職だった田村慈淳（後に堺本伝寺住職）を改宗帰入させたことが淵源である。

この頃、田村・石井・慈淳（本伝寺）三兄弟の教化によって新田秀賢（広賢）・新田伊三郎父子やその兄弟、佐々木、藤本、古川、秦、奥井、高木らが帰依して、池田には少数ながらもすっかりした講中が育っていたのである。

同じ頃、長柄薬師堂村にあった源立寺の矢野俊慎房が明治八年七月に逝去したが、後住もなく、従来の檀徒はみな兼務の蓮華寺に所属していたため、無住のまま、荒れるにまかせていた。そこに明治九年になって、府下の無祿・無住・無檀家の寺院は廃止せよとの指令が出て、いよいよ廃寺寸前に追い込まれてしまった。

これを知った田村由兵衛が、何とか廃寺を免れようと、石井政七と計って池田への移転再建を企て、池田講中の賛同を得て回った。ちょうど池田・槻木町には禅寺の宝相庵跡があつて町内で共有管理しており、これを購入すれば寺地移転許可を得る見通しもついていた。

そこで田村・石井兄弟は、隠尊の露師のお供をして蓮華寺に随侍していた当時十九歳の広正房（後の富士本智境、日装）をくどき落とし、やっとのことで辞令を受けてもらい、明治十年二月二十四日、源立寺十二代住職として長柄の陋屋に赴任してもらい、ひとまず、廃寺の憂き目を免れたのであつた。この時、府下で無住・無檀の寺院が廃止を免れた唯一のケースだつたという。

そこで、さつそく移転事業にかかった広正房は、同年四月に府庁に出願し、十一月に許可、同じく明治十年十一月下旬には移転入仏の法要をおこなっている。

この寺地移転事業に際して、広正房が蓮華寺および住本寺に在勤修行していたこともあつて、両講中から物心両面にわたつて多くの支援を受けた事は、広正房自筆の『当山由来』に記している。

「法縁の蓮華寺住職日優師並びに隠居泰雄坊日承師等、おのおの与かし檀家の信施を得て一毫の貪ぼりなく安々として一寺を建立す。

時の世話方、大阪には講頭森村平治、居田徳兵衛、田村由兵衛、牧野伊兵衛、虎谷いと、大石武助等なり。西京には加藤廉三並びに荒木儀兵衛（大阪の住人、この時京都に住す）、加藤五兵衛、原田武助、井上政七、桂善七等なり。みなみな同心して分限多少の論なく、信施を請う。この時加藤廉三（号致要）の作せる一寺建立寄付功德の説法本あり（注一）、この功他に異なりと称すべし。

荒木儀兵衛・田村由兵衛・石井政七等は源立寺再建に付いては言語に尽くせざる功あり。その他、時の世話人の功おろそかに思うべからず。

池田村には石井政七、新田伊三郎、同人父秀賢なる者あり、藤本善助等おのおの同心協力して大奉行これあり」

この時、現在地を建家付きの宅地・畑地あわせて百八十八坪、七十円で取得しているが、この寺地移転が近來まれにみる善行として、近隣からも好意をもって迎えられたようで、五十円を値引きしてくれたものである（注二）。

またこれを吉祥として新たに帰依する者もあり、寺地売買の世話をした寺部金五郎などもこの時に入信している。能勢の講中もこの時から源立寺に所属し、広正房の教導を受けることになったのである。

移転法要を終えた広正房は、九州から参詣した妙寿尼に二ヶ月間ほど源立寺の留守居を

たのみ、東京方面に折伏弘教にてかけ、その後も久留米の妙寿尼の応援にかけつけた。帰阪しては石井政七（後の石井広進房）らとともに縁故をたどっては布教に出向き、活動の足跡を川西や神戸・尼崎・丹波篠山に残している。

地元では新田・佐々木・古川・秦・奥井・山田等が池田講中の中核となつて熱心に護法のために尽力していたから、明治十一年二月には仮本堂もでき、四月六日には盛大に入院式を執行、西京・大阪・能勢その他からも多くの参詣があつた。

さらにその翌十二年六月には留守居の大野俊清らを発起人として、小さいながらも立派な本堂が新築されたのであつた。これらの事業に当たつて荒木清勇も応分の財物を御供養していることはいまでもない。源立寺に現存する御宝前の法華経十巻・経箱はこの時の寄進である。法華経の巻頭の見返しに三名の生前法号が記されている。清勇の号の初見でもある。これは明治六年のご奉公で胤師より授与されたものと思われるが、改宗して間もなくに法号を頂くなど、英一の深信が偲ばれる。

豪信院妙清日浄（妻きぬ）

剛信院妙勇日猛（不明）

強信院清勇日進（英一）

ところで、この時期の荒木清勇もまた、商用でしきりに京・大阪を往復し、時に池田に

も滞在して源立寺移転再建にも助力するかたわら、広正房や石井政七とともに、布教・問答等に多くの足跡を残している。

明治十一年六月の布師書状にも、

「田中原吾なるもの牧野宅にて数日問答これあるよし、さりながら荒木殿にて充分のよし、定めて一言二言には過ぐべからずと冥察いたし候・・・」

この文中の牧野宅とは、当時蓮華寺講中の中心者の一人牧野伊兵衛(号・浄実)であり、戦前まで梅田駅前桜橋にて旅館静観楼を営んでいた。この人物もこの後にもしばしば登場することになるが、荒木清勇とならぶ強信者であり、肝胆あい照らす同志であった。この静観楼で、堅樹日好流の流れを汲む「正法真道社」田中原吾との法論があり、荒木清勇が対論することになって、布師から全幅の信頼を寄せられていることがわかる。(但し、この問答は一旦収まったかに見えたが、明治十九年に田中が『ハカ本山頭謗法書』を刊行し、論難が再燃している。)

また、英一は、明治十二年四月に露師よりお守り御本尊を頂いているが、その授与書きには、

「摂州池田荒木儀兵衛」(蓮華寺蔵)

と記されているところから、池田町内に暫時仮寓していたと思われる。広正房の依頼で短

期間、源立寺の留守を預かったものか、あるいは問答等のために寄留していたものである。

かくして、英一はこれまでの日蓮宗との問答の早わかりとして、同年九月には、最初の著書『一致破責之事』を執筆し、活版で自費出版している。おそらくこれが明治に入って本宗初の活版による教義出版物になると思われる。いち早く新技術による出版を取り入れ、布教に活用することなど、いかにも英一の進取の精神を表すものである。

この他にも、大石寺の雪山文庫には、荒木清勇自筆の記録『池田件決答二件他』（明治前半諸問答）が架蔵されている。これは明治十五年頃にまとめた『池田問答記』と思われるがつまびらかではない（注3）。

この明治十年代の世相は、全国的に自由民権運動が盛り上がり、各地で演説会や討論会が開かれるようになって世論が沸き立った時代でもある。一方で、まだまだ情報や娯楽の乏しい時代であった。各種の新聞・雑誌が発行され、講演会などいずれも盛況を呈しており、法論や演説会は過熱して警察に制止される事も多かった。

また外来文化の流入は思想・信教の自由をはじめ、社会制度や産業・文物の変化をもたらし、生活慣習も急激に変化し始めていたから、仏教系各教団とも深刻な危機意識をもち、教義の近代化、教団の近代化に迫られていた。

このような事情は大石寺派でも同じことであって、少数ではあるが、こうした時代の流れをみきわめ、法滅の危機意識をもった篤信の僧俗が、活発な弘教を展開するとともに、同様の課題にも取り組んでいたのである。そして他教団が衰退し続けるなか、熱烈な護法心によって、排仏毀釈の痛手から立ち直り、ようやく衰運を挽回しつつあったといえる。

その先頭には、いつでも露師や妙寿尼・広正房、そして在家では荒木清勇・牧野父子・加藤父子らの姿があった。

(注1) 文中の加藤廉三の説法本は雪山文庫に現存する。

(注2) この境内地を中心に、このとき佐野妙寿尼が隣接地三十坪を寄進し、その後広正房および秦俊明房の丹精による隣接地購入により現境内地がなりたっている。石井政七も畑地を寄進している。

(注3) 現宗門は極端な秘密主義で、御宝蔵や雪山文庫等の典籍・文書類もほとんど法主が占有化しており、宗門僧侶と雖も特別許可がなくては閲覧もできない。従って池田滞在期の活動をものがたる直接資料も今は確認できない。

*大阪駅と静観楼

義母の寺田登勢が亡くなったのち、荒木清勇は事後の整理もひと段落した明治十二年の夏、大阪・堂島浜に転居している。

それより少し前、曾根崎村梅田墓地のそばに大阪駅が建ち、大阪―神戸間の鉄道が単線



會所料理茶

北新地裏町比叵
静観樓

樓

開通したのは、明治七年のことである。「梅田ステーション」と呼ばれた駅舎の位置は現在よりもっと西寄り、大阪中央郵便局辺りにあった。周囲はどこを向いても田畑や野原の広がるなか、ポツンと洋風の駅舎が建っていたという。神戸までは片道約二時間、乗車賃は、米一升が五銭の時代に大阪一神戸間が上等一円、中等七十銭、下等四十銭であった。いまの阪急・JR・阪神電車などの運賃と比べると信じられないような高値である。

そのうえ、駅員がほとんど士族出の官吏であったため、「オイ！ コラ！」式で「乗せてやる」というようなものだったから、庶民にとっては、雲の上の縁遠いものであった。

しかし、乗る人はなくとも、おかしようき陸蒸気の人気は抜群で、連日近郷から大勢の見物人が集まってきて、駅前広場の両側にあった芝生に寝転がったり、ゴザを敷いて弁当を広げ、高さ十層の木造塔から「カランカラン」と発車五分前の鐘が鳴るのを待った。いよいよ汽車が動くと思立ちになって手をたたいて喜び、乗客も窓から顔を出し手をふって応えたという。



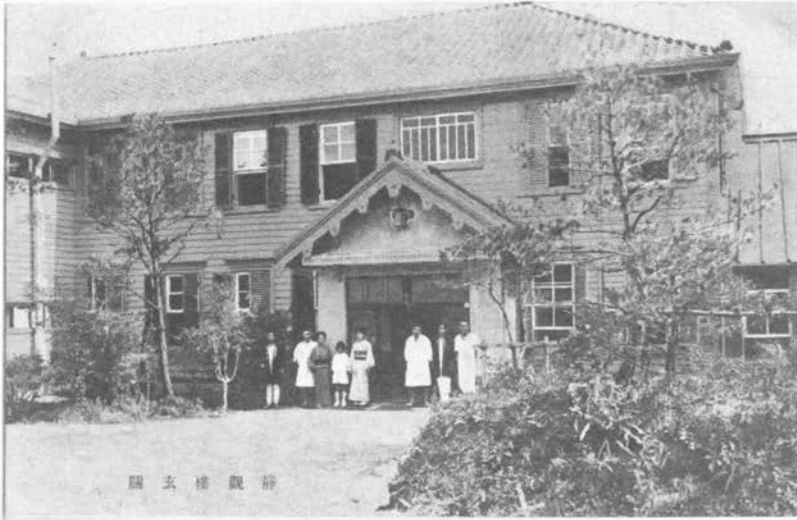
やがて、明治十年二月には京都・神戸間が全通し、明治天皇も
 行幸して盛大な開業式が行われ、だんだん利用者もふえて日に五
 ・六千人になっている。

ちようどその頃、蓮華寺講頭の牧野伊兵衛（号浄実）が梅田ス
 テンションのほど近く、いまの産経ホールの場所ので茶店「静観楼」
 を開いたが、これが当たって、評判を呼んだ。『北区誌』（昭和三
 十年刊）によれば、

「・・曾根崎の料亭静観楼（いまの産経会館の地に戦災前まであ
 った）は汽車を見物するのに絶好の場所となり、庭園の一隅に木
 造二階建ての洋館を新設して窓外の菜の花畑ごしに汽車を眺めつ
 つ酒宴が催された。・・」

と記している。千五百坪の敷地に大庭園と海水浴式温泉を持ち、
 数棟からなる割烹旅館だった。

周辺は年ごとに発展し、梅田の駅前道路も整備され、明治十九年



静観楼玄関

明治25年、旅館では大阪初の洋館の玄関

頃には梅田ステーションの前から六間幅の桜橋筋が開かれて堂島へも間近となり、静観楼の立地はさらに良くなった。そのため旅行者はもちろん、政財界の要人や著名人にも頻繁に利用されるようになり、大いに繁盛した。特に堂島米市場関係者の会合にはたびたび利用され、大阪でも有数の名旅館に成長していった。また、明治十七年には自由党解散の懇親会で板垣退助が大演説したり、明治二十二年には日本を代表する技術者の社交場「工師会」が静観楼苑内の一棟を借り受けて事務所兼倶楽部を開いて、多くの著名人に鼻肩にされている。名旅館になった明治二十五年頃には近代的な二階建て洋館を建てて話題となっている。

この牧野伊兵衛の営む静観楼は本宗にとってもまた大きな存在であった。それは露師をはじめとして、宗門の僧俗が布教や登山等で九州などへ往



庭園内から見た洋館

来するさい、いつでも特別な便宜が計られたらしく、大勢の僧俗が世話になっている。特に貫首かんずが西国巡教の際などは一行に無償で提供され、かなり長期にわたって滞在する例も多く、定宿同様になっていた。

また、大広間はしばしば布教演説会等にも利用され、明治・大正期の宗門にとって、関西の拠点として、静観楼の存在はかけがえのないものだった。

この牧野伊兵衛（浄実）とは肝胆相照らす仲間になっていた荒木清勇は、その誘いもあったと思われるが、本格的に堂島の仲買人として身を立てるべく大阪市堂島浜通り一丁目十七番地に移転し、事務所兼住居を構えたのが明治十二年の夏の頃であった。

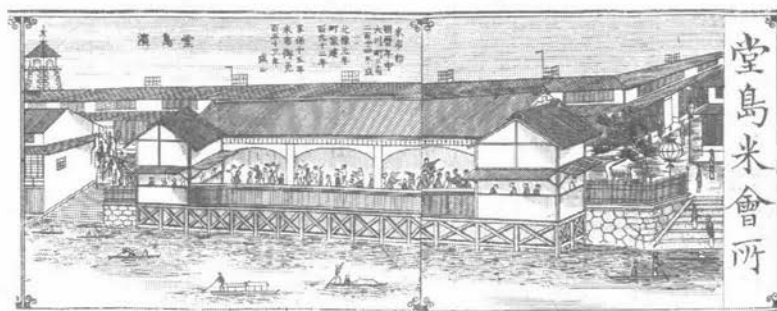
この堂島の住所を当時の地図で確認すると、御

堂筋・大江橋北詰から西へ四軒目にあたり、堂島川ぞいにあり、いま、そこには東京三菱銀行ビルが立っている。さらに西へ行くと、現在の大ビルと全日空ホテルがならんでいる。ここに大阪米商会所（後に大阪堂島米穀取引所に改組）があった。ここで全国の米相場を決める市場が立っていたのである。堂島浜通りには米穀仲買商の商店が軒を連ねており、そのほぼ中心に住居を構えている。三十歳になった英一にとっては、ひそかに心に期するものがあつての転居であつたに違いない。

さっそく露師を請待して入仏式をお願いしたようで、そのことが露師自伝の明治十二年七月十五日の項にもみえている。

*米相場師

「一手千両の市が立つ」とうたわれた堂島の米市場は、江戸初期に淀屋橋南の豪商淀屋辰五郎などの蔵元が、西国諸大名の積米を売買換金したことにじまる。その後淀屋取り潰しとなり、市場は堂島新地に移転して発展し、天明年間の記録には五百万俵もの回米があつたという。もちろん石高制による江戸時代の経済と、通貨本位の近代資本主義の経済では単純に比較することはできないが、明治以降もしばらくは、国家経済の支柱であつたことにかわりはない。堂島の米市場は、昭和十四年の国家総動員法による統制令によつて



廃止されるまで、二百数十年にわたって、文字通り天下の台所としての繁栄が続いていた。

堂島の米相場師の威勢をしめすエピソードを幾つか紹介してみよう。

当時は歌舞伎芝居などは堂島浜の旦那衆が大スポンサーであったから、丁稚などでも商店の名前をいうだけで芝居小屋にタダで入れたという。明治初年頃の大家相場師に北平こと北野平兵衛がいる。ある時、丁稚が「北平のもんや」といって木戸を入ろうとしたら「タダ見はお断り、みんな買い切るなら見せてやるがな」とからかわれた。それがグツと癪にさわった丁稚は「そんなら、みな買い切ってやるがな。ワイは北平の丁稚じゃ」となったので、驚いた木戸番のものが北平のところを問いかわすと、「そんなに云うのやったら、買い切ってやってくれ」と答えたという。

また芝居や相撲の興行はまず何を差しおいても堂島の組合に挨拶回りに行く習わしであった。ある歌舞伎興行で、役者があ

いさつに行くのが遅く、すっかり旦那衆の機嫌を損じてしまつて、芝居の幕開けができず、三日ほど遅らされてしまつたという話もある。(須々木庄平著『堂島米市場史』)

さらに驚くのは、阿部彦太郎という大相場師などの場合、この一派が明治二十四年秋に全国の売り方を向こうに回して買いまくり、数十万円の利益をあげたのであるが、それが当時の帝国議会予算案の金額よりも多かつたという。(『北区誌』)

このように生き馬の目を抜くような取引も、当初は道ばたの立会いで行われ、相場に熱気を帯びて興奮すると、回りからひしゃくで水をかけるといふものだった。それで明治九年の大阪米商会所の時に、堂島川にかけだし(舞台)を造つて市場とし、帳場を設けてからは場内の場立になつた。

それでも市場の中は「ばくち場」のようなもので、いまの馬券売場のような騒然とした雰囲気だつたという。ここで勝つたものはそのまま堂島浜の階段を下りて川舟で酒宴を開き、そのまま新地に繰り込んだ。毎夕三味線や太鼓の音色が流れて天神祭りのような賑わいだつたと伝えられている。

荒木英一(清勇)が堂島に移転してきた頃には、すでに新進の仲買人として通つていたようである。また、清勇にとって幸いしたのが米商会所の会頭磯野小右衛門が同郷人だつたことで、何かと便宜を計つてくれたらしく、仲買人兼株主として順調に地歩を固めてい

った。妻きぬの回顧談に、

「好平（長男・福重照平・明治十一年生）が赤ちゃんの頃には、手代が十人前後もおり、うばや女中さんもいて、なかなか景気がよかった」

と語っている。また、数年後に丁稚として入ってきた番頭の中には、後に北浜の証券取引所に転じて稀代の相場師として名を馳せた「北浜の天一坊」こと松谷元三郎もいた。

時流を見抜く眼力と度胸もあつた英一のもとには人材もあつまり、この新進気鋭の仲買人は、このあと米相場の世界で快進撃を続けることになる。

*よろず交渉役

ところで、寺地移転の祝いとして清勇から納められた露師の和歌幅（聯落ち・軸装）が、源立寺に伝えられている。

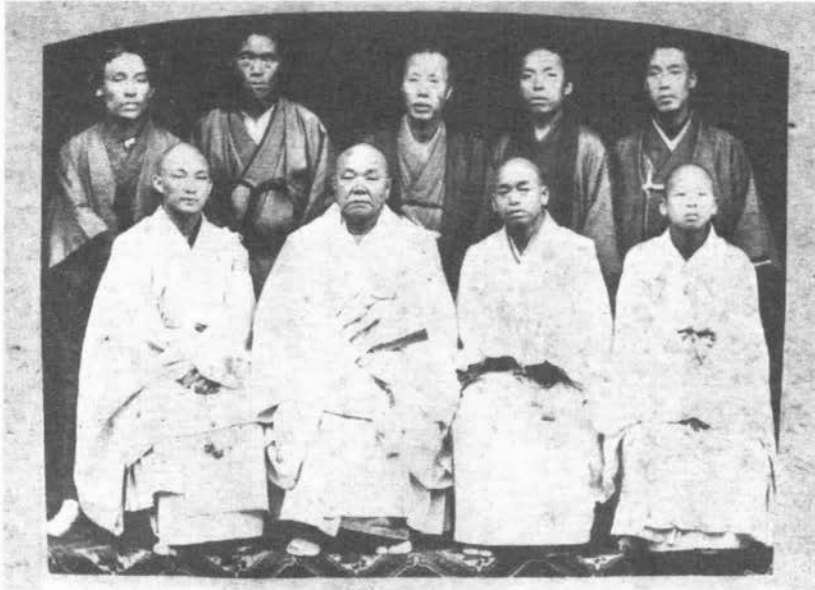
「四方山の高根々々をめぐりきて

富士の裾野にかかる白雪

嶽高く雪もたつふり裾広く

たか身にきても三国の一

庚辰の九月四日 荒木氏の宅にて 日活



中央左=霑師、後列中=牧野浄実、その右=荒木清勇(明治十年代)

というものである。庚辰かのえたつ(明治十三年)九月四日は、霑師が再び荒木清勇の家に招かれたことを意味するが、九月七日が寺田登勢の祥月命日忌であるところから、その供養の仏事を兼ねたものと想像される。ところが偶然にも、その翌日付けの霑師の書状が霑妙寺に残されていて、それには、

「今日出立につき、昨日荒木方へ請待され、その節に同人の申され候には、かねて牧野まで仰せ聞かせられ候、筑後新寺の件、このほど東京において福岡県令に随行いたされ候荒木元と申す四等属の県官に内談いたし候ところ、それは県令まで申すことにもこれなく、その係りにて何れもあいなる事と申すにつき、幸い右の件を扱ひ候何某も出京ゆえ承り候ところ、右は昼夜に人を集め太鼓を鳴らし、

祈禱などいたし、村内の人機にあいかかり候趣きにつき、かく取り計らい候とのことゆえ、まったくさように邪命を致すべき宗体にこれなき段、申し入れ候ところ、さ候はば又々申し出候はば何れにか取り計らい申すべきとの事にござ候。」「(『妙寿尼伝』)と記されていて、荒木宅での当日の談話の内容がわかる。

この話の件とは、明治九年秋、単身久留米地方に渡った佐野妙寿尼(広正房の法姉)の異流教化が実って、ようやく白山村に新出張所を開設し、明治十二年暮れになって露妙寺新築の許可を役場に提出したが、戸長はじめ村民の強い反対にあつて、申請が棚上げされて、計画がストップしていたのであつた。そこで、露師が心配し、その方策について、牧野伊兵衛を通して英一に相談があつた。英一は東京出張のおり、福岡県の役人に面会し、その扱いを質したところ、妙寿尼らを邪教視して地元民が反対しているとの返事だつた。それについて事情を説明してその誤解を解き、役人から再度許可申請をするようにとの返答を得ていたものである。

結局、この件は地元住民の強硬な反対にあつて実現できず、他所に移転したのであるが、英一は福岡出張の際に、福岡県役所を尋ねるつもりでいたようである。

この例に限らず、当時、宗門の役所向きの交渉がうまく運ばない場合、英一が頼まれて交渉役にあたるが多かつた。いわばよろず交渉役といった役回りである。この後にも

いろいろな事件の解決のために奔走しているが、これはその隠れた一幕である。

*ビール醸造の草分け

また、興味を引くことには、この頃、英一は米仲買業の余勢をかつて、ビール醸造業にも乗り出していることである。

日本人の手によるビール製造は、明治五年三月に渋谷庄三郎が、アメリカ人の醸造技師を招いて堂島中町に工場を設け、渋谷ビールとして製造・販売したことが最初といわれている（『日本ビール史』）

渋谷は当時の大阪における傑出した事業家の一人でもあり、多方面に活躍して、その足跡を残した人物である。このアメリカ人技師にビール製造を学んだのが渋谷家の番頭金沢嘉蔵という人物で、日本人最初のビール技師として、数々のビールを製造することになる。ところが、この最初の渋谷ビールは、当時の日本人の嗜好にあわなかったのと、まだ電氣や冷蔵設備などのない時代であるから、すぐに腐ってしまい、採算もとれなかった。無料で配るなど販売に努力したようだが、「まずい」「にがい」等と、不人気で、結局資金が続



荒木清勇の浪花ビール

かず、渋谷が体調を崩したこともあって明治十四年に製造中止に追い込まれていた。

これを聞いた英一は、ビール醸造業が廃止されるのを惜しみ、渋谷庄三郎からこの工場や設備をはじめ一切の商権と技師を借り受けて、事業継続に乗り出すことになったのである。ここに掲載した「浪花ビール」のラベルこそ、その足跡をものがたる商標である。

堂島浜の荒木宅から西へ二百メートルほど行くとビール工場があった。そこから荷車にビールを積み、堂島川を行き来する川舟に、ビールを無料で配り、通行人にもタダで飲んでもらったけれども、あまり評判がよくなかった。やはり時期尚早だったようである。販路は開けず、在庫はたまるで、結局、資金も底をついて数年ももたずに他人に商権をゆずることになってしまった。「ビールではずいぶん苦勞をした」と手伝ったきぬが後に語っている。

広く日本人にビールが普及したのは明治末年にビアホールが流行してからという。もともと普及する条件の揃わない時代では誰が手がけても採算のとれるはずがなかった。時代